

ボリビアの障害者に光を

南米・ボリビアで障害者支援施設をつくり、共同生活を送る小倉南区出身の野原昭子さん(50)が2年ぶりに帰国し、小倉北区のカトリック小倉教会で17日、報告集会を開いた。約30人が活動報告に耳を傾けた。

野原さんは16歳で修道院に入り、95年ボリビアに赴任。「(障害は神の)

罰があたったから」との迷信が信じられ、貧しい障害者の多くが満足な治療も受けられず部屋に閉じ込められている姿に心を痛めた。約10年前にシスターをやめ、支援に取り組むことにした。

全盲者の施設で2年働

き、8年前に支援施設「サン・マルティン・デ・ポールレス(聖マルティンの

野原さん小倉南出身里帰り講演

家」を開設。今年1月、ある日系人が寄付した建物に移転、幼児から30歳前後までの障害者20人と、スタッフ12人とで暮らしている。

野原さんは、最近保護した重度障害のある少年のことを話した。「真っ暗な部屋に横たわり、髪もツメも伸び放題。排せつ物にまみれた状態だっ

たが、体に触ると美しい笑顔を見せてくれた。両親はこのまま死んでほしかったんだと思う。彼らも生きるのに必死なのに分かっているから責められない」と現地の窮状を訴えた。

運営資金のほとんどは寄付に頼っている。昨秋、活動を伝えるテレビ番組が日本で放送され、支援



活動を報告する野原さん

の輪が広がっているとい

う。野原さんは「私が死

んでもこの活動を継続さ

せていきたい」と締めく

くった。

支援への問い合わせは

エルピス会(093・201・3692)。

【長谷川容子】